

3－6					
主題	特別養護老人ホームにおける作業療法士の役割				
副題	体と心の両方から考える仕事				
キーワード 1	作業療法士	キーワード 2	認知症	研究(実践)期間	24ヶ月

法人名・事業所名	社福) 白十字会 特別養護老人ホーム白十字ホーム
発表者(職種)	深谷竜(作業療法士)
共同研究(実践)者	須藤奈津子(リハビリ補助スタッフ)

電 話	042-392-1375	FAX	042-392-1255
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	白十字ホームは1967年に東京都で10番目の特別養護老人ホームとして開設されました。「トトロの森」のモデルになった八国山の麓に建つ定員170名の従来型の施設です。当施設は理学療法士、作業療法士、言語聴覚士が常勤で各1名ずつ、非常勤理学療法士3名、非常勤言語聴覚士2名在籍しています。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

当施設の平均介護度は東京都の平均介護度に比べて3, 65とやや低い数値を示しているが認知症を罹患した利用者が約6割にも及ぶ。2人に1人以上の利用者が認知症を罹患し、BPSDへの対応を職員は求められている。BPSDの中でも「何度も繰り返してしまう不安の訴え」「暴言等による他者トラブル」が特に多く見られている。また、認知症だけではなく高次機能障害や精神疾患を罹患している利用者も入居している。BPSDにより閉鎖的な生活となってしまう活動性の低下を引き起こし、ADL能力の低下まで影響を及ぼすと予測されるため、作業療法の特性を生かした取り組みを開始する。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

作業療法の特性として身体的側面と心理的側面をあわせもつ治療、生活支援の手段を用いる。BPSDである「不安」を訴えている利用者の多くは見当識障害を抱えている。見当識障害の改善を図ることは困難であるため、「安心できる場所の提供」に努める。まず心理的側面として作業療法の時間ではマンツーマンに近い状況での対応を行い、失敗のない作業を提供する。失敗のない作業を継続的に行うことで自己肯定感の向上に繋がり、作業療法の時間では落ち着いて過ごすことができるのではないかと考える。身体的側面としては車椅子座位姿勢の不安定さが見受けられる利用者に対して机上課題を行うことで体幹、上肢の動きを促し食事動作能力の維持を図る。

《3. 具体的な取り組みの内容》

令和4年5月より1フロア3～4名の小グループでの実施。5フロアある中で週1回1フロ

アでの実施となるため1フロアの実施頻度としては5週に1回となる。

- ・対象利用者：5フロア合計約20名。認知症を罹患している、もしくは認知症を罹患していても入所後から活動性の低下が見られ、ADL能力の低下が予測される利用者。
- ・スタッフ：常勤OT1名、リハ補助スタッフ1名
- ・実施時間：60分
- ・実施環境：クローズドな環境にするため各フロアのクラブ室やリハビリ室での実施
- ・製作作品：季節に応じた作品（お花紙を丸めたものを模造紙全体に張り付ける）を5フロアで順番に作成する。
- ・その他：車椅子座位姿勢の修正や上肢機能訓練を含む。

《4. 取り組みの結果》

急変等により実践期間中に対象者の変更はあったが参加者合計27名中11名にADL能力の維持が見られている（バーセルインデックスを用いる）。BPSSDが見られる利用者に関しては作業療法実施中であれば不安を訴えることなく過ごす事が出来ているが日常生活への汎化には至っていない。作業療法中の様子に関しては他職種と情報共有を行なっている。

《5. 考察、まとめ》

身体的側面でみればバーセルインデックスの数値上での維持が図れている利用者はいるが本質となる心理的側面でのBPSSDの緩和については日常的に有意性が認められていないのが現状である。緩和が得られない要因として実施頻度の少なさが挙げられる。作業療法ガイドライン内の論文では1回30分週1回以上の訓練を行うことで効果を得られたという報告が多く挙げられている。現在もコロナ対応により他フロアとの交流を持つことが難しいため、実施頻度の低下に繋がっている。徐々にコロナ対応について変更されてきていることもあるため、今後は週1回程度の実施ができるように検討していきたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- 「認知症テキストブック」（2010年）、山口晴保ら、中外医学者
「高齢期作業療法学」（2010）、松房利憲ら、医学書院
「作業療法ガイドライン認知症」（2019）、日本作業療法士会

《8. 提案と発信》

特養を含む老人福祉関連施設で働いている作業療法士は約3，4％である。まだまだ少ない数値ではあるが利用者の身体的介助量の増加に加え、心理的援助も多く求められていく中で作業療法士の特性が活かされていくと幸いである。